

## 基礎篇第二十一課 おけいこを みに いても いいですか : 許可・禁止の表現

著者	国立国語研究所
ページ	1-72
発行年	1983-03
シリーズ	日本語教育映画解説 ; 21
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002800">http://doi.org/10.15084/00002800</a>

基礎篇第二十一課

おけいこを みに  
いっても いいですか  
——許可・禁止の表現——

国立国語研究所

## 前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。

この第二十一課「おけいこをみにいってもいいですか」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 石田敏子（企画協議会委員・国際基督教大学専任講師）

資料1., 2. 日向茂男（日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

昭和58年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

## 目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・内容	2
2.2. 構成——場面を中心として	4
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い	4
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての解説	4
2.2.3. 各場面における事物の説明	19
3. この映画の学習項目の整理	25
3.1. 許可・禁止等を表す言い方	25
3.1.1. 許可・許容表現	25
3.1.2. 禁止表現	26
3.1.3. 必要・義務・当然の表現	29
3.2. 「～しておく」	30
3.3. 「～した方がいい」	31
3.4. 「～する前に」, 「～してから」	32
3.5. 女性の言葉	33
3.5.1. 敬語的表現, ていねいな表現	33
3.5.2. 女性特有の終助詞	34
3.5.3. 女性特有の単語	37
3.5.4. 言い切らない表現	37
3.5.5. 下品なことばをさける	37
3.5.6. イントネーション, 音調	37
4. 練習問題	38
5. 参考文献	44
資料1. 使用語彙一覧	47
資料2. シナリオ全文	66

## 1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「おけいこをみにいってもいいですか」は、その第二十一課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等に当たったものは、次のとおりである。

### 昭和56年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学講師  
木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授  
工藤 浩 国立国語研究所言語体系研究部研究員  
窪田 富男 東京外国語大学教授  
佐久間勝彦 国際交流基金日本研究部職員  
斎藤 修一 慶応義塾大学国際センター助教授  
杉戸 清樹 国立国語研究所言語行動研究部研究員

### 国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長  
川瀬 生郎 日本語教育センター日本語教育指導普及部  
日向 茂男 “ “ 日本語教育教材開発室長  
清田 潤 “ “ “ 技官

この映画「おけいこをみにいってもいいですか」は、日向茂男、清田潤の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び

日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い、執筆には石田敏子委員があたった。また資料1.，資料2.は、日向茂男が担当した。全体の企画，また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在，この映画は，より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお，この映画は，そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

## 2. この映画の目的・内容・構成

### 2.1. 目的・内容

この映画「おけいこをみにいってもいいですか」の主要な目的は、話し言葉における許可・禁止の基本的な表現を映像と共に提示し、その意味と用法の理解をはかることにある。

許可・禁止の表現としては、次の言い方が取り上げられている。

- (1) 「～してもいいです」(許可)

- (2) 「～してもかまいません」(許可)
- (3) 「～しなくてもいいです」(許可)
- (4) 「～してはいけません」(不許可・禁止)

許可を求める言い方に対して肯定・否定の二通りの答え方があるが、特に否定の場合には、否定の強さの程度に応じて、種々の答え方がある。そのうちで最も強い否定が禁止の表現となる。この映画では、許可・禁止の表現に関連した最も基本的なものとして、上記の主要学習項目の他に、次の表現も提示されている。

- (5) 「～しなければいけません」(必要・義務)
- (6) 「～しなければなりません」(必要・義務)
- (7) 「～しなくてははいけません」(必要・義務)
- (8) 「～した方がいいです」(すすめ)
- (9) 「～するようにして下さい」(要求)

これらの表現のうち、許可・不許可・禁止・必要・義務の表現は、この日本語教育映画基礎編のうち「おみまいに いきませんか」の中で関連学習項目として、すでに提示されている。

その他の学習事項としては、

- (10) 「～しておく」
- (11) 「～する前に」「～してから」

がある。(10)については、日本語教育映画「そうじは してありますか」の解説書に主要学習項目として、意味・用法の詳しい説明がある。

また、登場人物に若い女性が多いことから、女性ことば、特に、発話の起こし方、前の発話への続け方として、「あら」「ほんと」「ねえ」、「じゃ」等がかなりひんばんに出てくる。

これまでのこの基礎篇の映画が「です・ます」体にかなり厳しく統一されていたのに対し、この映画では、女性の友人同士のくだけた会話体とけいこの師と弟子の間の「です・ます体」の会話との差が紹介されている。

## 2.2. 構成——場面を中心として

### 2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって場面を分ける時には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それをさらに短いシーンに分ける時には、Ⅰ—1、Ⅰ—2、Ⅰ—3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①、②、③……のように通し番号をつける。類似文や変形文を引用する時には、①'、②'、③'……のようにする。変形引用が二つ以上ある時には、''、'''……の順で'を重ねていく。
3. この映画の中に現れていない文や語句を例示する時には、[ ] 付きの番号をつけ、それに関連した引用文や引用語句には、2.の場合と同様に'印をつける。一群の文や語句を例示する時にも、出現順に通し番号をつける。

本解説書での言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもみられるが、ここでは、積極的には、その問題に触れない。

なお、①、②、③……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文や、シナリオ全文につけられた番号と共通である。

### 2.2.2. 言語場面、言語表現についての解説

日本の女性の大半は、高校生ごろから結婚するころにかけて、勉強や仕事の合間に、華道（生け花）、茶道、料理、語学などを習いに行く。この映画では、数あるこれらの、いわゆる「おけいごと」のうち、典型的なものとして華道と茶道を取り上げ、そのけいこ風景を中心に、許可・禁止の表現およびその関連表現を提示する。

映画全体の構成は、現実場面と回想場面とに大別される。3人の若い女性が初夏（つゆあけのころ）の日本庭園で菖蒲の花を鑑賞している。この現実の場面に回想場面として、華道、茶道のけいこ場風景が挿入されている。これらの場面は、次のように組み合わせられてストーリーが展開する。



- |            |        |
|------------|--------|
| I 日本庭園     | (現実場面) |
| II 華道のけいこ場 | (回想場面) |
| III 日本庭園   | (現実場面) |
| IV 茶道のけいこ場 | (回想場面) |
| V 日本庭園     | (現実場面) |

5分間の映画の構成としては、やや複雑ではあるが、IIIの場面は、華道のけいこ場風景から茶道のけいこ場風景へのつなぎの場面で非常に短いシーンである。したがって、映画全体をI、II、IV、Vの四つの部分にわけ、各場面毎に独立した教材として使用することも出来る。

主な登場人物は、春子、夏子、秋子の3人の若い女性で、彼女たちの会話と回想を中心にして場面が動いていく。

主要な会話の場面は次の四つである。

- |                     |           |
|---------------------|-----------|
| (1) 女性同士の会話         | I, III, V |
| (2) 庭園の監視員と女性たちの会話  | I         |
| (3) 女性の1人と華道の教師との会話 | II        |
| (4) 女性の1人と茶道の教師との会話 | IV        |

華道と茶道のけいこ場風景は、「です・ます」体での許可・禁止の表現が日常、最も自然なかたちで使われる場面として選ばれた。「です・ます」体を重視するのは、この映画が日本語教育映画の基礎篇という性格をもっているからである。庭園の監視員が第三者として登場する場面設定も同じような配慮に基づいている。

## I 日本庭園で (①～⑳)

主だった登場人物が紹介される現実場面。

現実場面の撮影は、明治神宮の御苑内ぎょえんにある茶室、芝生、池、菖蒲田の附近で行われた。

明治神宮は、明治天皇(1852—1910)およびその皇后、昭憲皇太后(しょうけんこうたいごう)をまつる神社である。明治天皇は、第122代の天皇で

明治維新を成しとげられた。また、都を京都から江戸へ移され、東京とあらためられた。

神宮は、神社のある内苑ないえんと数多くのスポーツ施設や絵画館等を有する外苑がいえんとからなり、深い森にかこまれている。この森林は、「代々木の森」として大都会、東京に住む人たちの憩いの場所ともなっている。

面積は約70万平方メートル。全国各地からの献木は約17万本、305種。草類は352種に達する。また50余種の小鳥の楽園でもある。

正月には、初詣もつでの人々でにぎわう。

御苑は、江戸初期以来大名加藤家、井伊家の下屋敷の庭園であった。明治天皇が皇后と共に、たびたびお出でになったところから、この地に明治神宮が建てられたといわれる。

### I—1 茶室の前 (①～③)

茶室と思われる建物の前での女性達の会話。茶室は茶会のために使う建物で、詳しくは2.2.3.を参照されたい。この場面は、後の茶道のけいこの伏線ともなっている。

主要な登場人物である若い女性3人の歩きながらの会話から、この映画は始まる。

春子「①あら、茶室かしら。」

秋子「②入ってもいいのかしら。」

夏子「③そうね。」

①、②の「～かしら」は女性ことばで、不審、疑問の気持を表す終助詞。

①は自分自身に対して問いかけるニュアンスを持つ。

②の「入ってもいいのかしら」は許可に関する説明を求めている。後に出てくる⑥と比較されたい。「の」の用法については、アルフォンソ (1966) および久野暉 (1973) に詳しい説明がある。②の「かしら」は他への問いかけでありながら、話し手みずからの内部での疑念にとどまっている。

③は思案する場合の表現で、語尾が下がる。同じ「そうね」でも、語尾が

あがると同意を表す。

## I—2 茶室の前 (④～⑬)

前と同じ場面であるが、庭園の監視員が通りかかる。

秋子「④あっ、すみません。」

監視員「⑤はい。」

秋子「⑥中に入ってもいいですか。」

監視員「⑦まだ入れません。

⑧10時に門が開きます。」

秋子「⑨そうですか。」

監視員「⑩はい。」

秋子「⑪ありがとう。」

春子「⑫まだ開かないのね。」

夏子「⑬ねえ。」

前の場面が仲間同士の会話であったのに対し、この場面では、第3者の監視員が登場し、知らない人に対するあらたまった会話体になっている点に注意されたい。

④は、他人に何か聞く時の話しかけの表現。相手をわずらわせてすまないの意であり、過ちをわびる意味はない。他に、よびかけの表現としては、

④' あの、ちょっと。

④'' あの、ちょっとお聞きしたいのですが。

④''' あの、もしもし。

などがある。

⑥は、許可を直接に求める表現。②の場合と異なり、⑥は茶室の管理人であり、出入の許可を与える権限を持つと思われる人物にむけられた質問である。

⑦は、「入る」の可能形。入ってもかまわないが、まだ10時前で門が開かないので、「入れない」の意。

画面では、⑪の後に「フン」といった嘆息のような音が入る。これは、不満を表す、特に女性がよく使う表現である。これに続く女性たちの表情も不満を表しているようにみえる。

### I-3 芝生の前 (⑭～⑮)

神宮内苑の芝生はきれいに手入れが届いており、まわりにさくがしてある。一般に、日本の公園その他公共の場所にある芝生は、立入禁止になっている場合が多く、「立入禁止」「芝生に入らないで下さい」等の立札が立てられている。

芝生に入って写真を写している若い男性に、通りかかった監視員が注意する。

監視員「⑭もしもし、芝生には入らないようにして下さい。」

男「⑮あっ、すみません。」

⑭の「もしもし」は呼びかけの言葉。注意を与える場面での使用のため、語気が強くなっている。電話での用法は、「おみまいに いきませんか」の解説を参照のこと。

⑭は、ある行為をしないよう要求する表現であるが、「～しないで下さい」よりやわらかい印象を与える言い方である。「～しないで下さい」は積極的に行為を禁止する要求の表現であるが、「～しないようにして下さい」は、相手の自発的行為を求めているからである。

「芝生には」の「は」は強めの「は」。この場合には、「芝生に入らないようにして下さい」でもよい。

⑮は、④と同じ形の文ではあるが、あやまる時の表現。イントネーションが降調になっている。

### I-4 池の前 (⑯～⑰)

御苑内にある池の前。画面にみえる水草は睡蓮<sup>すいれん</sup>であるが、葦なども生えている。池の中には、鯉<sup>こい</sup>、鰻<sup>うなぎ</sup>、亀<sup>かめ</sup>等がたくさんいて、人がえさをやると集まっ

てくる。

池の上には板の台がはり出していて、ここから魚にえさをやることができるようになっていいる。これは、南池といわれる自然の古池。森の中に清水が湧き出ており、その水が途中、菖蒲田（しょうぶだ）をうるおしてこの池に注いでいる。秋から初夏にかけては鴨<sup>かも</sup>、おしどり等が集まってくる。

池中にはり出した台は「お釣台（つりだい）」と呼ばれる。ここから池の中の魚にえさをやることができる。今、この台上から池に石を投げている男の子に監視員が注意をする。

監視員「⑩坊や、石を投げてはいけませんよ。」

注意された男の子は石を投げるのをやめ、走り去ろうとする。注意されて、走り去るその途中で、何かにつまづき、ちょうどそこへ池の方へと歩いてきた春子、夏子、秋子の前どころぶ。

春子・夏子・秋子「⑪あっ、あら。」

⑩は禁止の表現。他に、

⑩' 「石を投げてはだめですよ。」

も可能。前の場面の⑩での成人男子に対する言い方と、ここでの小さな男の子に対する言い方との差に注意されたい。前者に対しては、ていねいさも含めてやわらかい表現を用い、後者では、ていねい体ではあっても、厳しい禁止の表現を使っている。

⑩での「坊や」は、12、3才位までの男の子のことである。ここでは呼びかけの言葉として使われている。

## I—5 菖蒲田(しょうぶだ) (⑩～⑫)

御苑内の菖蒲田である。

御苑内の菖蒲田は、明治30年頃より、明治天皇が、皇后のために水田に花菖蒲を植えさせられたもの。5月下旬から6月上旬にかけて見事な花が咲く。花菖蒲は、アヤメ科の多年草。初夏のころ、主として紫色の美しい花をつける。5月5日の端午<sup>たんご</sup>の節句（男の子の祭で3月3日のひな祭に「対するも

の) に用いるしょうぶとは、葉の形の似ているが、別の植物である。

映画の場面で遠くに小さく見えるのは、あずまやである。あずまやは、四本の柱だけで壁のない小屋のことであり、庭園などの休息所によくある。やがて三人はここまで来る。

花の美しさをめでる3人の女性たちの会話が続く。

夏子「⑱きれいね。」

秋子「⑲この紫の色、すてきね。」

夏子「⑳ねえ。」

春子「㉑ほんと。」

夏子「㉒ほら、こちらの白い花もいいわ。」

春子「㉓ずいぶんいろいろな菖蒲しやうぶがあるのね。」

夏子「㉔写真にとっておきたいわね。」

秋子「㉕そうね。」

⑱、⑲の「形容動詞の語幹(名詞)+ね」、⑳の「形容詞(動詞)+わ」、㉓の「動詞(形容詞)+のね」、㉔の「動詞(形容詞)+わね」は、女性の使う終助詞である。

㉑は、女性のよく使うあいづちのことばで、本来の「本当」の意味はあまり強くない。

㉔の「写真にとる」は「花を写真にとる」で、花を写真という形態におさめるの意を表す。「写真をとる」であれば「花の写真をとる」となる。

㉔の「～しておく」は、ある目的のために、その後のことも考慮に入れて事前に行うという意味合いが含まれる。ここでは、将来、いつかまた鑑賞するために花の美しさを写真におさめて、保存したいという意味を持つ。

「～しておく」はこの映画の学習項目の一つとしてもとりあげるが、「そうじはしてありますか」の主要学習項目になっているので、その解説も参照されたい。

㉕は、女性のあいづちで、同意を表す。

## I-6 菖蒲田の前 (26~29)

ここで、眼前の花から生け花のけいこへと話題が転換する。

秋子「26春子さん、お花のおけいこを始めたんでしょ。」

春子「27ええ。

28でも、まだ下手なのよ。

29この間も……。」

26の「お花」は「花」そのものではなく、「生け花」をさす。「お花」  
「おけいこ」の「お」は、女性がよく使う接頭辞。

27の「ええ」は「はい」よりくだけた感じの応答詞。10の監視員の「はい」のあらたまった感じと比較されたい。

28「のよ」は女性ことば。連体形につく終助詞で、断定の気持を軽く表現する。発話全体の意味は、「(始めたけれども)、(私は)まだ、(生け花が)下手なのよ。」である。

29は回想場面へのつなぎのことばで、「この間も…… (こんなことがあったのよ)。」といったニュアンスで言っている。「も」は既知のものと同様の事物を提示する係助詞。この場合、既知のもの、すなわち自分の「生け花」が下手であることの実例の例を導くことになる。

## II 生け花教室で(回想場面) (30~45)

29の春子のことばから、春子が生け花のけいこをしている生け花教室へと場面が変わる。春子は水盤すいばん(すいばんの説明は、2.2.3.参照。)に枝を生けている。生け花および生け花教室については、2.2.3.参照。

### II-1 花を生ける(1) (30~37)

生け花教師と弟子である春子との対話。あらたまった会話体になっていることに注意。

先生「30春子さん、ちょっと。

31これを生ける前に、ここを切っておきます。」

先生「㉔はさみは、しっかりと持つようにしてください。」

春子「㉕はい。」

先生「㉖ああ、そんなに力を入れなくてもいいですよ。」

春子「㉗はい。」

㉘「これでいいですか。」

先生「㉙いいですね。」

師弟間では、ふつう、姓を呼びあう。特に異性の師弟間で名前 (first name) を呼ぶのは、小学校時代までであろう。この映画では、名前に起因する複雑さ、わかりにくさをさけるため、一貫して春子、夏子、秋子が使われている。㉚で、男性の生け花教師が「春子さん」と呼びかけているのは以上のような理由からである。

㉚の「ちょっと」は、相手の注意を喚起する時の呼びかけの言葉。

㉛「切っておきます」は、枝をたてる時にきちんと立つようにという事後の事態を予想した表現。生け花の枝ものは、根もとをたてに割り（または、ななめに切り）、剣山けんざん（花を生けるための道具。2.2.3.参照。）の針と針の間に割った部分が入るようにして立てる。春子の枝がねてしまうのは、枝の根もとが太すぎて針の間に入らないからである。

㉜の「持つようにして下さい」はある行為を要求する場合のやわらかい表現。㉕の言い方を参照のこと。㉜の「しっかりと」の「と」はなくてもよい。この「はさみ」は、生け花用の花ばさみと呼ばれているもので、画面にみられるように一般のはさみとはやや異なる。

㉖「力を入れなくてもいいですよ」は許可の表現。「そんなに」は、「それほど強く」ということである。

㉗の「これで」の「で」は、範囲を表す用法。このぐらいの力の入れ方でよいかどうかを聞いている。

㉘' これはどうですか。

㉘'' これでだいじょうぶですか。

などと言いかえられる。



③⑦の「いい」は是認を与える時の用法で、③⑥の「けっこう」、③⑨の「だいたいょうぶ」と同じ使い方である。反対の表現としては③③の「違う」、③⑤の「だめ」がある。

## Ⅱ—2 花を生ける(2) (③⑧～④③)

生け花教師と春子の対話が続く。

春子「③⑧この葉は、切ってもかまいませんか。」

先生「③⑨いいえ、切ってはいけません。

④⑩いいですか。

④⑪ほら。

④⑫この葉を残しておいた方がいいでしょう。」

春子「④⑬はい。」

③⑧は、許可を求める表現。

③⑨は、断定的な禁止の表現。

④⑩は、質問文の形をとってはいるが、消極的な行為要求表現である。これから話し手のすることや言うことに聞き手が注意を払うよう求めている。

④⑩' いいですか、よく見ていて下さい。

④⑩'' いいですか、注意して聞いて下さい。

④⑪は、事物を示して相手の注意を促す時に使われる。言いたい内容をことばで示す場合もある。

④⑪' ほら、この間話したこと、覚えていますか。

④⑫は「～でしょう」という推定の表現の形をとっているが、相手の同意、確認を求めている。「残しておいた方が」は「残しておく方が」とも言いかえられる。これについては 3.3. で詳しく述べる。

## Ⅱ—3 花を生ける(3) (④④～④⑤)

生け花教師は、春子に指導を続ける。

先生「④④それは、もう少し下に向けるようにして下さい。」

先生「④⑤それを生けてから、ここにこの花を生けた方がいいですね。」

④④の「下に向ける」はこの場合、下の方へ枝先を下げるの意。「向ける」は、ある方向をさすように向きをかえる、ある方向へ正面をおく、ある方角をめざすの意。

④④「ようにして下さい」は④①、④②と同様に行為を求める表現。

④⑤「生けた方がいい」は「それを生けてから、ここに生けた方が」とも「ほかのところではなく、ここに生けた方が」とも解釈出来る。ここでは、後者の解釈をとる。

### Ⅲ 日本庭園で(2) (④⑥～④⑨)

生け花教室の回想場面が終わって、再び、日本庭園（現実場面）での女性どうしの会話に戻る。くだけた会話体になる点に注意してほしい。このⅢは、前にも触れたが、次の茶室の場面（回想場面）へ進むためのつなぎのシーンである。

#### Ⅲ-1 菖蒲田の小道を歩く3人 (④⑥～④⑨)

春子が、生け花のけいこについての感想を述べ、それに夏子があいづちを打つ。

春子「④⑥お花を生けるのは、難しいわ。」

夏子「④⑦そうでしょうね。」

春子「④⑧もっとおけいこしなくては……。」

④⑥の「お花」は、生け花ではなく花そのものをさす。「の」は動詞について動詞に名詞と同じ働きをもたせる。このことについては、「てんきがいいからさんぽをしましょう」の解説の3.2.を参照してほしい。

④⑧「～しなくては」は、完全な文にすると次のいずれかになる。

④⑧' 「～しなくてはならない。」

④⑧'' 「～しなくてはいけない。」

④⑧''' 「～しなくてはだめだ。」

会話体では「しなくちゃ」という縮約形がふつう使われる。㉞もこれと同様。女性のことばには途中で言い終わる表現が多いが、この場合は単なる女性特有の使い方のみならず、表現に余韻をもたせる働きもある。

### Ⅲ—2 菖蒲田の小道を歩く三人(2) (㉞～㉟)

夏子は、今度は秋子のお茶のおけいこの方に話を変える。

夏子「㉞秋子さん、今日は、お茶のおけいこでしょう。」

秋子「㉟ええ。」

夏子「㉟どんな先生？」

秋子「㉟とても厳しい先生よ。」

㉞は「ボクハウナギダ」と同種の構文で、「今日は、お茶のおけいこへ行く日でしょう。」の意味。

この場合の「お茶」は、茶道をさす。㉞は、次のお茶のけいこの回想場面への導入となっていると同時に、Vの伏線にもなっている。㉟、㉟は、どんなお茶の先生が登場するのかの伏線にもなっている。

### Ⅳ 茶室 (回想場面) (㉟～㊱)

茶室での茶のけいこの一部分が紹介される。秋子が先生の前でお茶のけいこをしている。お茶のけいこは、弟子がお茶をたて、先生がその一つ一つの動作を個人的に指導するという形で行われる。一般に、茶の道具を運びこむところからけいこが始められる。この場面は、もうかなりけいこが進んだ段階で、釜かま(湯をわかすもの)から、湯をすくう時の柄杓おしやく(湯をすくい取るもの)の取り扱い方について、秋子が注意を受けている。道具の名称等については、2.2.3.を参照。

#### Ⅳ—1 お茶をたてる(1) (㊱～㊲)

秋子の柄杓の取り上げ方を先生が注意する。

先生「㊲あっ、だめです。」

㉔右手をもう少し高くあげなければいけません。」

秋子「㉕これでいいですか。」

先生「㉖けっこうです。」

㉓「だめ」は、いけない、違っている、の意。「そんなことをしてはだめです」の意で、非常に強い禁止の表現である。反対は、いいです、かまいません、けっこうです、等。㉗、㉘、㉙、㉚を参照。

㉔「高くあげなければいけません」は、必要・当然の表現。

㉕「これで」の「で」は㉞と同様に限度、範囲を示して、「いいですか」で許可を求めている。この場合は右手の高さを示しながら聞いている。

㉖は、㉗と同じ是認を与える言い方である。

#### Ⅳ-2 お茶をたてる(2) (㉗~㉙)

秋子が茶碗に湯を入れる。これは茶碗をゆすぐために入れる湯で、茶をたてるための湯ではない。茶碗をゆすいでから釜の向う側にみえる布巾ふきん（白い小さい布）でふき、それから茶をたてる。

秋子は、柄杓の底を釜の向こう側のふちにおき、柄杓の先を釜の手前のふちにおこうとして失敗し、柄杓を釜の中に落としてしまう。

秋子「㉗あつ、すみません。」

先生「㉘もっと注意して、置かなくてはいけません。」

秋子「㉙はい。」

㉘「～して、置かなくては」は、動詞の「～て」の形に補助動詞「おく」がついたもの(㉔, ㉑, ㉒, ㉑)ではなく、「注意して、(柄杓を)置く」の意味である。この映画では、「～して」の後で少し間をおいてから「置かなくては」と言っているが、ふつう、必ずしも間をおくわけではない。アクセントの面からいうと、補助動詞の場合は「しておく」となるが、㉘のような場合は、「して、おく」となる。

「置かなくてはいけない」は、義務・必要の表現。㉔を参照。

㉘' 置かなければいけません。

⑤〃置かなければなりません。

⑤〃置かなくてはなりません。

とも言える。

#### Ⅳ—3 お茶をたてる(3) (⑥0～⑥3)

お茶のけいこ風景が続く。

先生「⑥0秋子さん、違いますよ。

⑥1その蓋<sup>ふた</sup>を先<sup>ま</sup>に取っておきます。

⑥2やり直して下さい。」

秋子「⑥3はい。」

⑥0の「違う」は、秋子のお茶をたてる手順が間違っているのを見ての発話。

⑥1の蓋は、水さし（水の入っているつぼ状の器）の蓋をさす。「先に」は、「柄杓を取る前に」の意。この場合の「～ておく」は「対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させる」時の「～ておく」である。3.2.を参照。

⑥2の「やり直す」は、「もう一度はじめから正しい手順でする」こと。「～して下さい」は積極的行為要求の表現。

ふつう、棗<sup>なつめ まつちや</sup>（抹茶——茶道で使う粉の茶——を入れておくもの）は、もう少し立てて持つ。ここでは、中の抹茶を画面に出す配慮のため、棗の中がよくみえるような持ち方をしている。

茶杓（茶をすくうもの）について茶を茶碗のふちでたたいて落とす時には、故意に音をたてる。茶道では、茶器のたてる音も考慮に入れられているのである。茶のすくい方は、流派により異なるが、この流派では抹茶の山をくずさないように山のまわりをすくいとする。

全体で5分間というこの映画の時間的制約から、ここで示されているのは、茶をたてる手順の一部分にすぎない。

#### Ⅴ 日本庭園(3) (⑥4～⑥8)

茶室での回想場面が終わり、三たび現実場面へ戻る。

V-1 菖蒲田一 (64~70)

秋子もお茶のけいこについて春子と同じような感想をもらす。

秋子「64なかなか上手にならないわ。」

夏子「65難しいんでしょうね。」

66でも、私もお茶を習ってみたいわ。」

秋子「67じゃあ、いっしょに習いましょうよ。」

夏子「68今日、おけいこを見に行ってもいいかしら。」

秋子「69ええ、だいじょうぶよ。」

70先生に紹介するわ。」

65の「難しいんでしょうね」は、「難しいのでしょうね」の音韻変化で、くだけた会話体の言い方。推量の形「でしよう」の代わりに「です」とも言えるが、「でしよう」の方がやわらかい言い方である。この「の」は、茶道の難しさについての説明を要求している。

66「習ってみたい」は、「～してみたい」の形。「～てみる」の「みる」は補助動詞で動詞の示す動作をためしに行うことを表す。

67「じゃあ」は、くだけた会話体で使われ、結論を導き出そうとする時に用いられる表現。書きことばおよびていねいな会話体では「では」になる。

68については、Ⅲ-2の場面、特に49の表現を参照のこと。今日、秋子はお茶のけいこに行くことになっている。「～てもいいかしら」は、許可を求める表現。この場合の「かしら」は、相手に対する問いかけであるが、話し手のためらいを表し、「もし、めいわくでなければ」のニュアンスを含む。

①、②の用法と比較されたい。

69は次のように言いかえることが出来、たんに許可するのみでなく、相手に確認を与える。

69' いいわよ。

69'' かまわないわよ。

69''' どうぞ。

## V-2 菖蒲田(2) (㉗～㉘)

三人は、散歩を終えて、それぞれ茶道、華道のけいこへと出かける。

春子「㉗あら、もうこんな時間。

㉘お花のおけいこに行かなければならないわ。」

秋子「㉙えっ？

㉚あら、ほんと。

㉛私、遅刻だよ。」

春子「㉜じゃ、急いで行かなければ。」

夏子「㉝さあ、早く行きましょよ。」

春子・秋子「㉞ええ。」

㉗は場面転換のためのせりふで、「こんな」は、時間が遅くなったことに対する驚きを含む。㉘は必要・義務の表現。「なければならぬ」ということばで、春子も今日は、生け花のけいこに行く日であることが分かる。

㉙の「私」の後に、「は」が省略されている。くだけた会話体ではよく起こる現象である。「遅刻」は、茶道のけいこが始まる時間に遅れてしまうの意である。

㉚は完全な形にすると次のいずれかになる。

㉚' 急いで行かなければならぬ。

㉚'' 急いで行かなければいけない。

会話体では、「行かなけりゃ」という縮約形が使われるのが普通である。義務の表現。

㉛は自分も含め、他者の行為をうながす。それに残りの二人が㉜で同調し、三人はあずまやを出、菖蒲田の中を通過して、道を急ぐ。楽しい散歩は、終わった。

### 2.2.3. 各場面における事物の説明

この映画では、若い女性のけいこごとの中から華道と茶道を簡単に紹介したが、それぞれの場面に出たいろいろな事物について興味を抱く学習者も多

いと思う。ここでは、華道、茶道の順に映画中の事物やそれに関連する事柄について簡単な説明を加え、学習者からの質問があった場合の一助としたいと思う。説明にあたっては、事物名の後に主な場面の番号を加える。

## (1) 華道について

### 生け花(Ⅱ)

枝、葉、花を切り取って水を入れた花器にさし、飾りとする技術。古くから伝わり発展してきた日本独特の技法。観賞的立場と宗教的立場の2方面から発生したといわれる。平安時代には、すでに室内装飾としての花が生けられていた。枝と花を組み合わせて三角形の構成を中心にし、水ぎわをまとめて生ける。

種々の技法がある。その主なものをあげると、  
立華(りっか) = 種々の道具を用いて複雑な技法で生ける伝統的な型にはまった様式。たとえば、針金などを用いて枝ぶりを整え、大きなかめにさす。  
投入(なげいれ) = 丈の高い花器かきに自由に自然の姿をいかして生ける。剣山のような花どめは使わず、切り口を工夫したり、枝などを使ったりして花を固定する。

盛花(もりばな) = 広口の花器や籠などに自由に生ける。ふつう、剣山を用いて根本を固定する。

前衛花 = 石、針金、発泡スチロール等、自然の枝や草花以外の素材も利用し、生け花の中に造形性を見い出そうとする。ショーウィンドウの飾りや舞台装置などにも活躍の場を拡げた。

池の坊、草月等、いろいろな流派があり、「家元」と呼ばれる流派の正統を伝える独特の制度によって支えられている。

この映画は小原流おぼらの生け花教室で撮影された。小原流は明治末期に小原雲心が大阪に起こした盛花、投入の一流派である。

### 生け花教室(Ⅱ-1, 2, 3)

生け花のけいこ場には、種々の形態がある。教師が自宅で開くもの、生け花学校や各種成人学校の生け花クラス、花屋や女子社員の多い会社や学校へ



教師が出張して教えるもの等がある。この映画は、東京虎の門の日本青年会館で開かれている生け花教室で撮影された。

### 水盤（すいばん）（Ⅱ—1,3）

この映画で使われている皿様の広口の浅い花器は、水盤とよばれる。

### 剣山（けんざん）（Ⅱ—1,3）

花の根本をとめるために用いる生け花用の道具。金属製の針を上向きに多数植えたもので丸型、角型、大小等、種々の形がある。

太い枝を固定するには、根本をななめにそいだり、たてに割ったりして、針の間にたてる。こうしないと針がねてしまい、枝をたたせることが出来ない。根本の扱いは流派により異なる。



## (2) 茶道について

### 茶室（Ⅰ—1,Ⅳ）

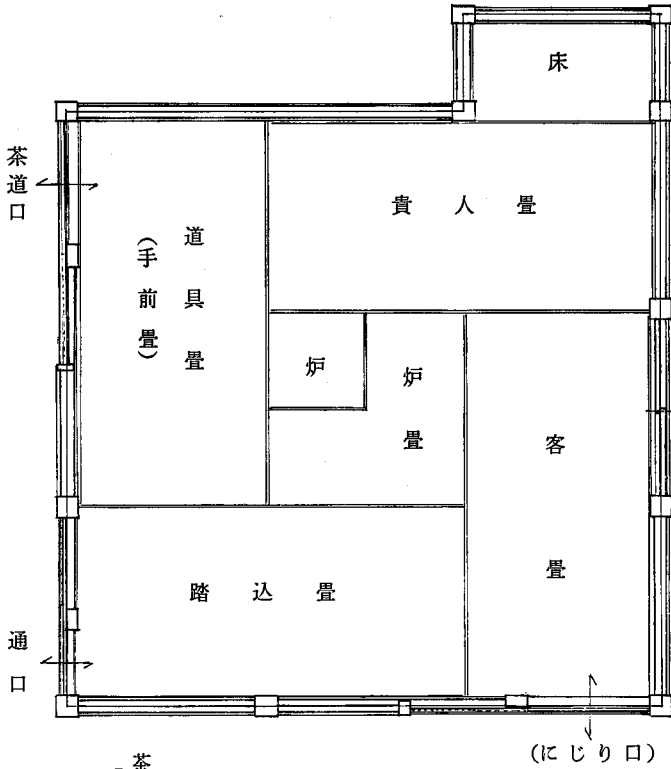
茶会に使う部屋、または独立した建物。四畳半を基本とし、種々の大きさのものがある。この映画の茶室は、神宮御苑内にある独立した京風の建物で、隔雲亭（かくうんてい）と呼ばれる建物の一部である。戦災で焼け、昭和33年に復元された。

草庵茶室（独立した茶室）には、にじり口と呼ばれる茶室特有の出入口がある。高さ2尺2寸5分（69cm）、幅2尺1寸（64cm）で千の利休（1522～1591）が作ったものである。身分の高い人でも低い人でも同じように頭を下げ、へり下った気持で茶室に入ることを目的としているといわれる。

### 茶道（ちゃどう、さどう）＝茶の湯＝（Ⅳ）

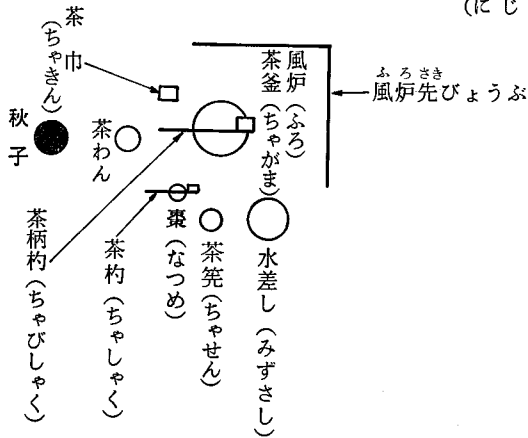
茶を飲む習慣は、奈良時代に中国より伝わった。茶の湯によって精神を修養し、その礼法を究めようとする茶道は、室町時代、僧村田珠光によって始

◎茶室の内部



◎茶道具の名称 (N)

(道具の配置は、流派により異なる)



(注) 風炉の上に茶釜をのせる。

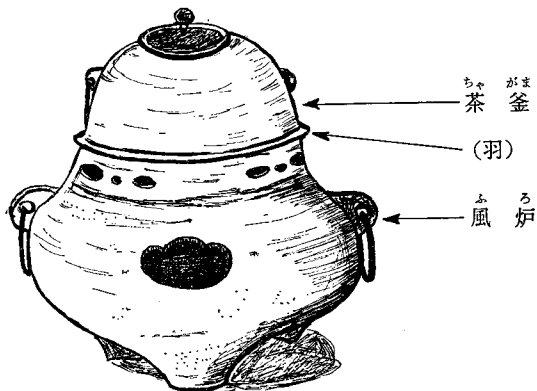
められ、千の利休が大成した。利休は禅の精神を取り入れた簡素静寂を主体とする茶を広めた。表千家、裏千家を始めとし、多くの流派に分かれている。この映画は、石州流片桐宗猿派のけいこ場で撮影された。石州流は片桐石州が江戸初期に形成した一流派。

生け花同様、家元制度によって伝承されている。

この映画からも分かるように、茶道では一つ一つの動作が、きちんと流派により決められている。

### 茶釜（ちゃがま）（Ⅳ-1,2）

茶の湯に用いいる釜。画面にみられるように、上部が狭く、羽とよばれる

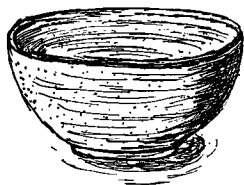


つばがあるものもある。鉄、真ちゅうなどで作る。

### 風炉（ふろ）（Ⅳ-1）

茶の湯をわかすために使う円形の炉。主として夏秋に使う。縁の一方に穴があいており、風が入るようにしてある。

### 茶碗（ちゃわん）（Ⅳ-2）



茶碗は、日常、御飯を盛ったり、お茶を入れて飲むために使われる陶磁器のことである。茶の湯では、一般に御飯茶碗や湯茶碗よりやや大きめの茶碗（直径15cmぐらい）が使われる。色々な形の茶湯茶碗があり、茶碗は茶の湯では特に珍重さ

れる。主人は茶碗の模様のある面を客に向けて出し、客は、茶碗を手の上でまわし、模様を主人側に向けてから茶を飲む。飲み終わったら、また元のよう  
に模様をもどしてから茶碗を置く。

川端康成の「千羽鶴」では、茶碗が小説の展開に重要な役目を果たしている。

#### 抹茶（まっちゃ）（Ⅳ－２）

茶道で使う茶。茶の新芽を粉にした茶を使う。湯をそそいでかきまぜ、泡をたてて客に供する。

#### 水差し（みずさし）（Ⅳ－３）

釜に水を足したり、茶わんを洗ったりするためのもの。水を入れておく器。秋子は、蓋を取る手順を間違える。

#### 茶筌（茶筌—ちゃせん）（Ⅳ－３）

茶をかきまわして泡をたたせる道具。10センチ前後の竹製。竹の先を細く割って末端を内側に曲げてある。真直ぐのものもある。

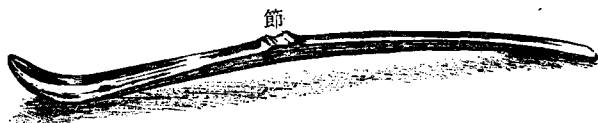


#### 棗（なつめ）（Ⅳ－３）

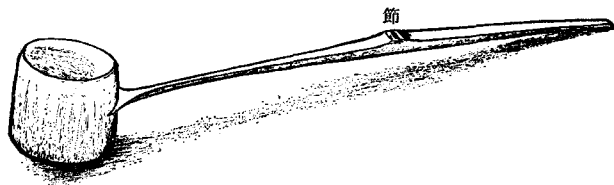
抹茶を入れておく蓋つきの器。形がナツメ（果実・英語名 Chinese date）に似ている。大・中・小の三種がある。多くは漆塗。

#### 茶杓（ちゃしゃく）（Ⅳ－３で、秋子が使用）

抹茶をすくい取るさじ。竹、木、金属、象牙等で作り、珠光形、利休形などがある。（長さは、およそ15～18cm。）



#### 茶柄杓（ちゃびしゃく）（Ⅳ－１，２で、秋子が使用）



小さい竹製の柄杓（直径およそ5.5cm。柄の長さは、およそ33～34cm）。茶釜から湯を汲みとるのに使う。

茶巾（ちゃきん）（Ⅳ—1,2,3）

茶わんをふくのに使う白い小さな布。

袱紗（ふくさ）（Ⅳ—1,2,3）

秋子が腰につけている赤い小さな布（27×29センチ）。絹の布を表裏2枚合わせて作る。茶の道具のちりを払ったり、茶わんを受けるのに使う。

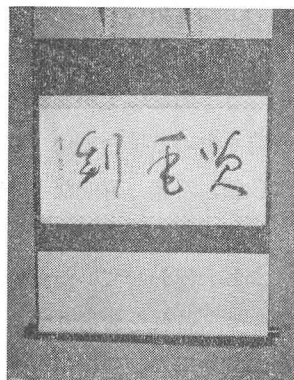
風炉先（ふろさき）びょうぶ（Ⅳ—1,2,3）

風炉先（道具置の向こう）にたてる二枚折りの小さなびょうぶ。広間で道具置を他から区別するためや、部屋全体をひきしめるために使う。

掛け軸（Ⅳ—2）

茶室の壁に掛け軸がかかっている。掛軸は、和漢の文字や絵をかいて表装し、装飾用に床の間などにかけて、鑑賞するもの。季節やその場にふさわしいものが選ばれる。ふつう、軸が下についていて、しまうときにはその軸に巻く。

字は右から左の方に「吹毛剣（すいもうけん）」と読む。吹毛（の）剣は、吹きつける毛を切るほど鋭くよく切れる剣の意。



### 3. この映画の学習項目の整理

#### 3.1. 許可・禁止等を表す言い方

##### 3.1.1. 許可・許容表現

許可を表す言い方には、話し言葉では、「いい」、「かまわない」、「さしつかえない」、「許す」、「許可する」などがあるが、動詞・形容詞、および同じ活用形式を持つ助動詞の連用形+接続助詞「て（も）」（形容動詞の場合は

「で(も)」に「いい」、「かまわない」、「さしつかえない」、「よろしい」などをつけて他人の行為に対する許可・許容を表すことも出来る。この映画で取り上げているのは、この表現形式である。

- [1] a してもいい／しなくてもいい。  
b 食べさせてもかまわない。  
c 取られてもさしつかえない。  
d お使いになりましてよろしゅうございます。

主語が話者自身の「(私は) してもいい」は、「しませんか」という勧誘に応ずる意志を表す場合と、あまりしたくないが、の意味が言外に込められた譲歩を表す場合とがある。

形容詞の連用形+「て(も)」, および名詞+「で(も)」に「いい」、「かまわない」などがついたときも、譲歩を表す場合がある。

- [2] a 冷くてもいい。(熱い方がいいが)  
b 鉛筆でもかまわない。(ペンの方がいいが)

許可を求める場合には「てもいいですか」、「てもかまいませんか」などの他に依頼, 希望, 可能などの表現を用いることも出来る。

- [3] a ここを通して下さいませんか。  
b 使わせていただきたいのですが。  
c これをお借りできますか。

形容詞や形容詞型活用をする助動詞に「～ても」が接続する場合、くだけた会話体では、「～っても」となることがある。

- [4] 冷くってもいい。

使役の形を許可を求めるために使う場合があるが、この映画では使われていない。

- [5] a 休ませて下さい。  
b 手伝わせてよ。

### 3.1.2. 禁止表現

禁止の表現は、否定的行為を要求する命令表現である。基本的な言語形式

としては、次の二つがある。

(1) 動詞の基本形に終助詞「な」をつける。

(2) 動詞、形容詞、形容動詞の連用形+「ては」に「いけない」、「ならない」、「だめ」等をつける。

この映画では、許可表現に対する不許可表現として、(2)の形式の禁止表現を取り上げている。

[6] a してはいけない。

b してはならない。

c 冷くてはいけない。

d 冷くてはならない。

e 不親切ではいけない。

f 不親切ではならない。

無意志動詞（「雨が降る」、「花がさく」等のように人間の意志によって左右出来ない事柄を表す動詞）は、禁止表現をとりにくい。

会話では「～ては」の縮約形「～ちゃ」を使うことが多い。

[7] a しちゃいけない。

b しちゃならない。

許可表現「～でもいい」、「～てもかまわない」が口語的であるのに対し「～てはいけない」、「～てはならない」は、やや文語的な使い方である。

ある行為をしないように求める場合には、この映画に限らず、一般に(2)の不許可の表現を使うことが多い。これは(1)の否定の命令ではあまりに強すぎて角がたつからである。同じような理由で、それに代わる行為を積極的に要求したり、勧告したりする表現も多く使われる。これらの表現もまた、命令表現の一種ではあるが、比較的婉曲な言いまわしをする。

この映画の中にも、強い言い方をさける例がみられる。特に否定の答え方に注意してほしい。たとえば、1-2の⑥「中に入ってもいいですか」という秋子の許可を求める問いに対して、監視員は⑦、⑧で「まだ入れません。10時に門が開きます」と可能の否定形で答え、はっきりとした禁止表現はさ

けている。

また1-3, 1-4で監視員は注意する時に相手によって表現を変えている。男の子に対しては「してはいけない」という比較的強い印象を与える不許可の表現を使い、成人の男性に対してはやや敬意を含めて「しないようにして下さい」というやわらかな要求表現をしている。

Ⅱ-2の春子の㉔「切ってもかまいませんか。」の問いに対して、先生は㉕「切ってはいけません。」と不許可の表現を使っているが、これは教える立場の者としての発言である。許可を求める問いに対する答え方を、おだやかな順にならべると次のようになる。

- [8] 「切ってもいいですか。」→
- |   |                   |
|---|-------------------|
| { | a 「切らない方がいいでしょう。」 |
|   | b 「切らないようにして下さい。」 |
|   | c 「切らないで下さい。」     |
|   | d 「切ってはいけません。」    |

最も一般的な否定の答えは「切らないで下さい」であろう。

渡辺洪は「ては」と「ても」を組み合わせた用例を示して、次のように述べている。(『ては』と『ても』『日本語教育辞典』1982, 大修館)

- (1) 「ては」禁止——「ても」禁止
  - 酒を飲んではいけないし、煙草は吸ってもいけない。
- (2) 「ては」禁止——「ても」許可
  - 酒を飲んではいけないが、煙草は吸ってもいい。
- (3) 「ても」許可——「ては」禁止
  - 煙草は吸ってもいいが、酒を飲んではいけない。
- (4) 「ても」禁止——「ても」禁止
  - 酒を飲んでもいけないし、煙草は吸ってもいけない。
- (5) 「ても」許可——「ても」許可
  - 煙草を吸ってもいいし、酒を飲んでもいい。

以上のように、「ては」は、ある行動を全体から切り離し、限定して



禁止する場合に用いられ、これに対応する「ても」は、ある隣接する行動を、主要な領域に併合して、許容又は禁止する際に用いられる。

「ては」は、すべて禁止に連なり、「ても」は許容を主とし、禁止にも用いられるが、「ても」が禁止に用いられるのは、対になっている文が禁止である場合に限られる。(p.445)

### 3.1.3. 必要・義務・当然の表現

動詞、およびある種の助動詞の未然形または形容詞、形容動詞の連用形に「なければ(なくては)」+「いけない」、「ならない」がつくと義務(必要、当然)の表現になる。

- [9] a しなければいけない。
- b しなければならぬ。
- c しなくてはいけない。
- d しなくてはならぬ。
- e 冷くなればいけない(なくてはいけない)。
- f 冷くなればならぬ(なくてはならぬ)。
- g 静かでなければいけない(なくてはいけない)。
- h 静かでなければならぬ(なくてはならぬ)。

これは、そうする以外は許さないと、ある行為を強制する命令表現の一種である。行為者が話し手自身である時には義務の表現となり、行為者が聞き手である場合は、強制表現になる。

- ④⑨ 「もっとおけいこしなくては……。」
- ⑦⑫ 「お花のおけいこに行かなければならぬわ。」
- ⑩⑮ 「急いで行かなければ。」

は、いずれも義務の表現である。一方、

- ⑤⑪ 「右手をもう少し高くあげなければいけません。」
- ⑥⑬ 「置かなくてはいけません。」

は、強制の表現である。

これらの表現も会話では縮約形が使われることが多い。

[10] a しなくては→しなくちゃ

b しなければ→しなけりゃ、しなきゃ

必然的に起こる回避出来ない事柄の場合には、「しなくてはいけない」は使わず、「しなくてはならない」を使う。この形式は規則や条文等、遵守すべき事柄にも多く用いられる。

### 3.2. 「～しておく」

「～しておく」は将来のことを考慮に入れた行為を表す表現で、基本的には、対象を変化させその状態を持続させる意味をもつ。

吉川武時（1977「日本語動詞のアスペクトの研究」）は「～しておく」の意味を七つに分けて述べている。この分け方に従って、この映画で使われている「～しておく」を考察してみる。

(1) 対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることをあらわす。

本動詞「おく」の意味が生きているものから「放任」、「準備」、「一時的処置」などの意味のものまでも含まれる。

○ わたしの家では、見かねて、このあいだ、「ごみをすてないでください。」と立てふだを立てておきました。

(2) 対象を変化させ、その結果の状態を持続させる。

○ 加藤さんは奥さんに鍵をあずけておいたんです。

②④の「写真にとっておきたい」は、対象となる花が「写真にとられる」という変化をした結果の状態が続くという意味でこのグループに入れられるが、美しさを保持しておいて後に鑑賞するというニュアンスも含まれている。その意味で「すがた（アスペクト）- もくろみ（動作のあらわす動作がなんのためにおこなわれるかをあらわす）的」（高橋太郎，1976「すがたともくろみ」）であるといえよう。

(3) ある時までに対象に変化を与えることを表す。

○ 議題を予告し、資料があれば配っておく。

(4) 放任を表す。

○ 「ほうっておけばいいんだよ！」

「放任」を対象に働きかけないことを持続させると解釈するのであれば、④の「この葉を残しておいた方が」はこのグループに入れられる。

(5) 準備のためにする動作を表す。

○ 今のうちに習っておきなさいよ。

③の「これを生ける前に、ここを切っておきます」の「切っておく」は準備のための動作を表している。⑥の「その蓋を先にとっておきます」も「先に」が文中にあるので、「準備のために」の意味を帯びることがはっきり表されているが、これがなければ(1)の意味であるとも考えられる。

(6) 一時的処置を表す。

○ 一応預っておこう。

これは、準備の一種とも考えられる。

(7) 特例

○ お安くしておきます。

形式上は(1)～(6)のいずれかの意味であるが、本当に意味するところは別にある例がこのグループに入れられる。

人間および動物の動作を表す動詞が「～しておく」の形をとる。基本的にはいつも他動詞を使う。しかし、準備的な動作を表す場合の主体の状態をかえるもの、蓄積が可能な行為などには自動詞も使うことが出来る。

○ 風呂に入っておく。

○ じゅうぶん遊んでおく。

「～しておく」はこの基礎篇の映画「そうじは してありますか」、および文化庁作成日本語教育映画「おばあさん とつぜん かえる」の主要学習項目として、すでに取り上げられているので参照してほしい。

### 3.3. 「～した方がいい」

二つの事物を比べた時の一方を指す言い方「(～より) ～の方が」に「い

い」をつけた形で、本来は比較の表現である。しかしこの映画中の「～した方がい」は、「した方がいでしょう」、「した方がいですね」という文末の表現からみて、消極的に行為を求めている勧告の表現として取り扱う方が妥当であろう。むしろ、これも、特定の場面で用いられる命令表現の一種と考えられる。この表現では常に二つの事項が提示され、話し手のすすめる方の行為が表現の中心を占めている。たとえば、㊸の「残しておいた方がい」では「残さないよりも」が言外に示されている。

時の概念は「い」「よかった」の部分で示される。前述したように「残しておいた」は「残しておく」とも言いかえられる。この場合は、抽象的な時間の観念よりも、話者の主観的な心の持ち方が示されているという解釈が妥当であろう。「残しておいた方が」は話者の確信をもって述べる時の形、「残しておく方が」はごく一般的に言う時の形である。この体感的な時制については、板坂元著「日本人の論理構造」第9章等に述べられている。㊹の「花を生けた方が」についても同様のことが言えよう。

### 3.4. 「～する前に」、「～してから」

「～する前に」、「～してから」は動作の順序を示す表現である。

「～する前に」に対応する表現は「～した後で」である。「S<sub>1</sub>てから S<sub>2</sub>」と「S<sub>1</sub>た後で S<sub>2</sub>」との差を久野（1974）、は次のように説明している。

S<sub>1</sub> テカラ S<sub>2</sub>

S<sub>1</sub> の主語の意図的計画によって、S<sub>2</sub> が（物理的あるいは心理的に）S<sub>1</sub> の直後に起きる。

S<sub>1</sub> タアトデ S<sub>2</sub>

S<sub>1</sub> が起きてから不特定の時間がたった後、S<sub>2</sub> が起きる。S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> との間に意図的な時間の前後関係があってもなくてもよい。

「S<sub>1</sub>てから S<sub>2</sub>」は「直後」の意味の他に「以来」の意味を表す場合がある。これは、S<sub>1</sub> が結果動詞（主体の状態が変化するような動作・作用を表す動詞。「～している」の形で、動作・作用の結果の状態を表す。）で、S<sub>2</sub>

が「(時間)がたつ, (時間)になる」という表現, または「いる, ある, ~している, ~してある, (名詞・形容詞) +だ」などの形をとる状態表現の場合である。

[20] お花のおけいこを始めてから, 5年になります。

他に「直後」の動作を表す表現として「~て」がある。「S<sub>1</sub>て, S<sub>2</sub>」はS<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>を結び合わせるだけの役目しか持たず, 時間的な順序には必ずしも従わない。ふつう, 同一主語の文に使われる。

[21] a. Aは芝生に入って, 写真をとった。

b. Aは芝生に入ってから, 写真をとった。

上記の二つの文を比較すると後者の方が順序を強調している。

### 3.5. 女性の言葉

この映画には, 登場人物の大半が女性であることから, 女性特有の言葉づかいが随所に使われている。

女性特有の言葉には次のような特徴がみられる。

- (1) 敬語的表現, ていねいな表現を多く使う。
- (2) 女性特有の終助詞を使う。
- (3) 女性特有の単語を使う。
- (4) 中止形, 体言どめなど, 言いきらない表現を多く使う。
- (5) 漢語などの固い言葉や下品な言葉をさける。
- (6) 音の強調が多く, イントネーションも変化に富む。

この映画の中の会話にもみられるこれらの特徴について, 順次, 例をあげながら述べてみよう。

#### 3.5.1. 敬語的表現, ていねいな表現

女性は, ていねいさや尊敬の意を表す接頭辞「お」, 「ご」を男性より頻繁に使う。この映画で使われている「おけいこ」, 「お茶」, 「お花」等の「お」がこれにあたる。「お入り下さい」, 「お立ちですか」, 「お寒うございます」等, 動詞や形容詞にもつける。

### 3.5.2. 女性特有の終助詞

女性が使う終助詞には、「わ」、「よ」、「の」、「こと」、「な」、「もの」、「ね」等がある。

「わ」

断定的な表現をやわらげる役目をもつ。動詞・形容詞の基本形，過去形「です・ます」体，「だ」体につく。推量形の平叙文や疑問文には使えない。「よ」、「ね」を伴うこともある。

- [11] a 紹介するわ。(70)
- b 遅刻だわ。(75)
- c 上手にならないわ。(64)
- d 行かなければならないわ。(72)
- e 習ってみたいわ。(66)
- f いいわ。(22)
- g 難しいわ。(46)
- h とっておきたいわね。(24)

「の」

断定や疑問を表す。男性も年少者や女性に対して使う。動詞，形容詞の基本形，過去形，「です・ます」体につく。「だ」体の場合は連体形「な」につく。疑問文にも用いる。「ね」、「よ」、「だわ」を伴うこともある。「のです」、「のですか」の略した形とも言えるが、「したんですの」の「の」をどう解釈するかが問題になる。

- [12] a あるのね。(23)
- b 開かないのね。(12)
- c 下手なのよ。(28)

他に「しますの」、「しますの?」、「下手ですの」、「下手ですの?」等がある。

「よ」

男性も使う助詞であるが，女性の使う「よ」とは使用法が異なる。女性特

有の「よ」は、動詞・形容詞の基本形、過去形には直接つかず「わ」、「の」が間に入る。文の終止部の中止形「——て」には直接つく。

名詞にも直接つく。この映画で使われている「よ」を中心に、男女両方の使い方をまとめると次のようになる。

男 女	男	女
いいですよ。(84) 違いますよ。(60) 先生ですよ。	いいよ。 違うよ。 先生だよ。	いいわよ。いいのよ。 違うわよ。違うのよ。 先生よ。(52) 大丈夫よ。(69)
習いましょうよ。	習おうよ。	習いましょうよ。(67) 行きましょうよ。(77)
いけませんよ。(16)	いけないよ。	いけないわよ。 いけないのよ。

この映画には表れていない用例。

形容動詞につく例；

- [13] a 静かですよ。(男女)  
b 静かだよ。(男)  
c 静かよ。(女)

中止形につく例(女)；

- [14] a 行かなくてよ。(断定)  
b 行ってよ。(頼み)

「かしら」

不審、疑問の気持を表す女性特有の終助詞。名詞および動詞、形容詞の基本形につく。動詞の否定形につくと願望を表す。

- [15] a 茶室かしら(①)  
b いいのかしら。(②)  
c いいかしら。(68)  
d するのかしら。(不審・疑問)

e しないのかしら。(不審・疑問)

f しないかしら。(願望)

### 「ね」

男女とも最も多く使う助詞で、相手の感情に何かをうったえかける時に使われる。女性特有の「ね」の用法は、「よ」の用法と同じである。

男女	男	女
そうですね。 きれいですね。	そうだね。 きれいだね。	そうね。(3) きれいなね。(18) すてきなね。(19)
いいですね。 (37, 45)	いいね。	いいわね。/いいのね。
ありますね。 開かないですね。	あるね。 開かないね。	あるわね。/あるのね。(23) 開かないわね。/開かないのね。(12) とっておきたいわね。(24)
そうでしょうね。	そうだろうね。	そうでしょうね。(47, 65)

この映画には出て来ないが、中止形につくと、依頼文になる。

[16] a 行ってね。

b 行かないでね。

### 「こと」、「もの」

他に「こと」、「もの」などがあるが、この映画では使われていない。

「こと」は感動、断定、疑問を表す時に終助詞として使われる。

[17] a きれいだこと。(感動)

b 行くことよ。(断定)

c 行かないこと?(疑問)

「もの」は理由、根拠を示し、不平、不満、甘えを表す。

[18] a くやしいんですもの。

b きれいだもの。

c つまらないもの。



「な」

命令形に「な」がつくと、女性のことばになる。この映画では使われていない。

- [19] a 下さいな。  
b おっしゃいな。

### 3.5.3. 女性特有の単語

昔は女房詞と呼ばれる女性特有の単語が使われていたが、現在では少なくなっている。それでもなお、「あたし」などにみられる人称代名詞、ていねいさを表す「まし」、「ませ」、また、「あら」、「まあ」などの感動詞の使用は女性に限られている。

### 3.5.4. 言い切らない表現

文の終止部に中止形などを使ったり、体言どめの問いかけをしたりする。この映画にある例を含めて示す。

- ⑤① どんな先生？  
⑦① もうこんな時間。  
②①, ⑦④ ほんと。  
④⑧ もっとおけいこしなくては……。  
⑦⑥ いそいで行かなければ。

- [20] a いつ行って？  
b 行かない？  
c 明日行かって。

### 3.5.5. 下品なことばをさける

女性は、男性がげんかに使う言葉や、ある種の飲食や肉体に関する言葉をさける。

- [21] a めし、はら、けつ  
b ぬかす、くらわす、くらう  
c 馬鹿野郎

### 3.5.6. イントネーション、音調

女性のイントネーション、音調は変化に富む。この映画の中の感動詞④、④、⑭、⑮、⑰、⑱、㉓、㉔や、⑬、⑯の「ねえ」の音調や、会話のイントネーションに注意されたい。たとえば、男性の「まあ」と女性の「まあ」は音調面で差がある。

女性ことばの用法は年齢層や社会層によっても異り、時代の影響も受ける。現在の日本語の男女差の実態を探った調査結果では、ここにあげたような女性ことばの特徴は、現在も保たれていると報告されている。

#### 4. 練習問題

A 「してもいいです」、「してはいけません」の練習

A-1 下のことばを「してもいいです」、「してはいけません」の形に言いかえなさい。

(例) 映画を見る →  $\left\{ \begin{array}{l} \text{「映画を見てもいいです」} \\ \text{「映画を見てはいけません」} \end{array} \right.$

a 芝生に入る	b 石を投げる	c 写真をとる	d けいこを始める
e 花を生ける	f 葉を切る	g はさみを使う	h 力を入れる
i 下に向ける	j ここに置く	k ふたをとる	l やり直す
m お茶を習う	n (お)けいこを見に行く	o 先生に紹介する	p 早く行く

A-2 上のことばを使って、例のように言いかえなさい。(学習者を質問者 (I)、応答者 (R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>) にわけて言わせる。)

(例) 映画を見る →  $\left\{ \begin{array}{l} \text{I: 「映画を見てもいいですか」} \\ \text{R}_1: \text{「はい、見てもいいです」} \\ \text{R}_2: \text{「いいえ、見てはいけません」} \end{array} \right.$

B 「しなければなりません」の練習

B-1 上のことば（A-1）を「しなければなりません」の形に言いかえなさい。

B-2 上のことば（A-1のc以下）を使って例のように言いかえなさい。（A-2と同じ要領）

(例) 門を閉める → { I : 「門を閉めなくてもいいですか」  
R<sub>1</sub> : 「はい、閉めなくてもいいです」  
R<sub>2</sub> : 「いいえ、閉めなければいけません」

C 「しないようにして下さい」の練習

下のことばを使って例のように言いかえなさい。（学習者を質問者（I）、応答者（R）にわけて言わせる。）

(例) 芝生に入る → { I : 「芝生に入ってもいいですか」  
R : 「いいえ、入らないようにして下さい」

a 茶室に入る	b 門を開ける	c 高くあげる	d 池で泳ぐ
e 花をとる	f 枝を折る	g 葉を残す	h 遅刻する
i 紙くずをすてる	j 辞書を見る	k 電話をする	l 早く来る

D 「した方がいいでしょう」の練習

D-1 ( ) 内に与えられたことばを「した方がいいでしょう」の形になおして答えなさい。

a 写真はどうしましょうか。(とる)
b この葉はどうしましょうか。(切る)
c この花はどうしましょうか。(生ける)
d このふたはどうしましょうか。(ここに置く)
e いつ行きましょうか。(すぐ行く)

以後、学習者に適宜質問を作らせ、他の学習者に「した方がいいでしょう」を使って答えさせる（できれば実物を持たせて）。

D-2 下のことばを使って例のようにいいかえなさい。(Cの要領で)

(例) 写真をとる → { I : 「写真をとってもかまいませんか」  
R : 「いいえ、とらない方がいいでしょう」

a 葉を切る b (お)酒を飲む c ここに置く d ふたとをとる  
e 芝生に入る f 窓をあける g たばこをすう h スピードを出す  
i ここで遊ぶ j あの人に話す k 遅く行く  
l 早く帰る

D-3 下のことばを使って例のように言いかえなさい。

(例) 病気がなおる, 運動する → 「病気がなおってから, 運動した方がいいでしょう」

a 門が開く, 入る  
b 学校を卒業する, お花のおけいこを始める  
c ひまになる, 映画を見る  
d 花を生ける, お茶を入れる  
e もっと勉強する, 試験をうける  
f ふたとをとる, お湯を入れる  
g 上手になる 友達に見せる  
h 食事をする, 出かける  
i 花が咲く, 見に行く  
j 休みになる, 旅行する  
k よく調べる, 先生に聞く  
l そうじをする, 客をよぶ

D-4 「いつ, ~しましょうか」「~してから, ~した方がいいでしょう」の形を使って適宜学習者間で練習させる。

(例) 「いつ旅行しましょうか」→「春になってから, した方がいいでしょう」

E 「しておきます」の練習

E-1 下のことばを使って「~する前に~しておきます」の形に言いかえなさい。

- a これを生ける, ここを切る
- b 客が来る, 花を生ける
- c お茶を入れる, 湯をわかす
- d 湯を入れる, ふたをとる
- e 試験をうける, 勉強する
- f 店が閉まる 買物をする
- g 春になる, 洋服を買う
- h 結婚する, 料理を習う
- i クラスが始まる, 本を読む
- j しかられる, かたづけ
- k 車を買う, 免許を取る
- l お客が来る, そうじする
- m パーティーが始まる, ビールを冷やす

E-2 下のことばを使って例のように言いかえなさい。

(例) 門を開ける →  $\left\{ \begin{array}{l} \text{I: 「門はあけてありますか」} \\ \text{R: 「はい, あけておきました。」} \end{array} \right.$

- a ストープをつける
- b 窓をあける
- c 切符を買う
- d ホテルを予約する
- e 靴をみがく
- f お茶を出す
- g そうじをする
- h 電話をかける
- i 電気をけす
- j 風呂をわかす
- k 料理を注文する
- l 切手をはる
- m 車を直す
- n パンを焼く

E-3 「～しておいた方がいいですよ」を使って文を完成させなさい。

- a 若いうちに
- b 今のうちに
- c 暗くならないうちに
- d ひまなうちに
- e 忘れないうちに
- f 冬にならないうちに
- g お金があるうちに
- h 元気なうちに
- i 朝のうちに
- j 学生のうちに
- k あの人が来ないうちに
- l 子供がねているうちに
- m 店が開いているうちに
- n 気が変わらないうちに
- o 酔わないうちに
- p 日本にいるうちに

## F その他の練習

### F—1 場面にあわせた会話練習

- (1) 映画の内容について教師の質問に答えさせたり、学習者どうし対話させたりする。

たとえば一度通して見せた後で、場面ごとに区切って見せ、質問する。はじめは教師が学習者に対して質問し、徐々に学習者どうしの質問応答もっていく。画面に即した非常に簡単な質問から始める。

質問例（場面 I—1 について）

1. 女の人たちは何をしていますか。
  2. 女の人たちは何人いますか。
  3. この人たちはだれとだれとだれですか。
  4. この人たちはどこにいますか。
  5. この人たちは何について話していますか。
  6. この画面について話して下さい。
- (2) 役割分担をきめて会話練習を行う。
- 各場面ごとに区切って見せた後、VTRの音量を0にして画面のみを見せる。学習者の役割をきめて指名し、画面にあわせた会話を行わせる。時間やクラスのサイズによるが、何組か指定して行わせる。時間に余裕があれば会話をテープに録音し、後で再生し表現法、発音、アクセントに関する適切な指導をする（場面がよくのみこめるまで数回見せてから行う。）
- (3) 学習者に説明させる。

上記と同じ手順で、学習者に各場面を説明させる。

### F—2 シナリオを利用した練習

- (1) 読解（漢字を含む）の練習をする。
- (2) 女性ことばを男性ことばに直させる。
- (3) 全体をくだけた会話体に直させる。

### F-3 発展的な練習

- (1) 趣味についての自由会話
- (2) 日本文化・自国の文化についての自由会話
- (3) 植物庭園等についての自由会話

### F-4 以上の学習の後での作文練習

F-3の(1)～(3)までの項目を取り上げて作文を書かせる。

以上、いろいろな練習例をあげたが、単に映画を一通り見るのみでなく学習者のレベル、傾向にあわせて、種々の側面から十分活用していただきたい。

## 5. 参考文献

- 板坂 元 1971 『日本人の論理構造』 講談社現代新書
- 井出祥子 1979 「女のことば, 男のことば」『ことば』3巻12号 英潮社
- 上野田鶴子 1972 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号 日本語教育学会
- 大野晋他 1977 『岩波講座日本語 7——文法Ⅱ』 岩波書店
- 金田一春彦編 1976 『日本語動詞のアスペクト』 麦書房
- 久野 暉 1974 『日本文法研究』 大修館
- 国際交流基金 1978 『文法Ⅰ——助詞の諸問題——』
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』 秀英出版
- 1960 「話しことばの文型(1)——対話資料による研究——」 秀英出版
- 1963 「話しことばの文型(2)——独話資料による研究——」 秀英出版
- 佐久間鼎 1942 『現代日本語法の研究』 恒星社厚生閣
- 1957 『現代日本語の表現と語法』 恒星社厚生閣
- 鈴木一彦・林巨樹編 1972 『助詞』(品詞別日本文法講座9) 明治書院
- 鈴木重幸 1975 『日本語文法・形態論』 麦書房
- F. G. パン編 1981 『日本語の男女差』 東西手話学会
- 真下三郎 1948 『婦人語の研究』 東亜出版
- 三尾 砂 1958 『話しことばの文法』 法政大学出版局
- 森田良行 1971 「動作の起こり方を表わす語について——『てしまう, ておく, てみる, た』の用法——」『講座日本語教育』第7分冊 早稲田大学語学教育研究所
- 1975 『複文の文型練習——「たら」「て」を含む文型を中心に——』『同上』 第11分冊



- 1978 『基礎日本語』 角川書店
- 吉川武時 1980 「『～から』をめぐる諸問題」『日本語学校論集』7号 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 国語学会編 1949 『国語学辞典』 東京堂出版
- 日本語教育学会編 1982 『日本語教育事典』 大修館
- 広田栄太郎他編 1951 『文章表現辞典』 東京堂出版
- 松村明編 1971 『日本文法大辞典』 明治書院
- 井口海仙他編 1795 『原色茶道大辞典』 淡交社

# 資 料

## 資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
  - 2.—1. 接頭語「お」や、接尾語「さん」「じ(時)」は、見出し語として取り上げている。
  - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立てている。
  - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。サ変複合動詞は、「する」を切り離して二語扱いにしている。
  - 2.—4. 「ない」「なくては」「なくても」は、見出し語にしている。
  - 2.—5. 形容動詞は、「\_\_\_な」の形を見出し語にしている。
  - 2.—6. 「でも」に前接する「ん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
  - 2.—7. 「ならない」「いけません」「かまいません」は、見出し語にしている。
  - 2.—8. 助動詞「た」や接続助詞「て」、またそれに「は」や「も」の付いた「ては」や「ても」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
  - 3.—1. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は「ます」形であるか、「—て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞が違えばさらに下位分類してある。また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。補助動

詞の意味・用法の違いによる下位分類はしていない。

- 3.—2. 「いい」は、その意味・用法により下位分類してある。
- 3.—3. 「です」「でしょう」は、それに伴う終助詞の種類、また「でも」「でしょう」に「ん」が前接するかどうかにより下位分類してある。
- 3.—4. 助詞「か」「が」「に」「ね」「の」等は、その意味、用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ません」については文例の列举を省略し、文番号だけを示した。「ましょう」は省略していない。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には（ ）で語の使用回数を示した。

ああ(1)

㉔ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

あきこ [秋子] (2)

㊸ あきこさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

㉙ あきこさん、ちがいますよ。

あく [開く] (2)

(1)⑧ じゅうじにもんがあきます。

(2)⑫ まだあかないのね。

あげる [上げる] (1)

㉚ みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

あっ(5)

④, ⑬, ⑤⑦ あっ、すみません。

⑰ あっ、あら。

⑤③ あっ、だめです。

あら(4)

① あら、ちゃしつかしら。

⑰ あっ、あら。

⑦① あら、もうこんなじかん。

⑦④ あら、ほんと。

ありがとう(1)

⑪ ありがとう。

ある(1)

㉛ ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。

いい(11)

(1)②② ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

(2)③⑥⑤⑤ これでいいですか。

(3)② はいってもいいのかしら。

⑥ なかにはいってもいいですか。

- ③4 ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。
- ⑥8 きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。
- (4)④2 このはをのこしておいたほうがいいでしょう。
- ④5 それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。
- (5)③7 いいですね。
- ④0 いいですか。

いいえ(1)

- ③9 いいえ、きってはいけません。

いく [行く] (4)

- (1)⑦7 さあ、はやくいきましょよ。
- (2)⑦2 おはなのおけいこにいかなければならないわ。
- ⑦6 じゃ、いそいでいかなければ。
- (3)⑥8 きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

いけません(4)

- (1)①6 ぼうや、いしをなげてはいけませんよ。
- ③9 いいえ、きってはいけません。
- ⑤8 もっとちゅういして、おかなくてはいけません。
- (2)⑤4 みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

いける [生ける] (4)

- (1)④5 それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。
- (2)③1 これをいけるまえに、ここをきっておきます。
- ④6 おはなをいけるのは、むずかしいわ。
- (3)④5 それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

いし [石] (1)

- ①6 ぼうや、いしをなげてはいけませんよ。

いそぐ [急ぐ] (1)

- ⑦6 じゃ、いそいでいかなければ。

いっしょに(1)

⑥7 じゃあ、いっしょにならいきましょうよ。

入れる [入れる] (1)

③4 ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

いる [色] (1)

①9 このむらさきのいる、すてきね。

いろいろな(1)

②3 ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。

ええ(4)

②7⑤0⑦8 ええ。

⑥9 ええ、だいじょうぶよ。

えっ(1)

⑦3 えっ？

お(10)

②6 はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

②6 はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

④6 おはなをいけるのは、むずかしいわ。

④6 もっとおけいこにしなくては……。

④9 あきこさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

④9 あきこさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

⑥6 でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

⑥6 きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

⑦2 おはなのおけいこにいかなければならないわ。

⑦2 おはなのおけいこにいかなければならないわ。

おく [置く] (5)

(1)⑤9 もっとちゅういして、おかなくてははいけません。

(2)②4 シャしんにとっておきたいわね。

③1 これをいけるまえに、ここをきっておきます。

⑥1 そのふたをさきにとっておきます。

(3)④② このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

か(6)

(1)⑥ なかにはいってもいいですか。

③⑥ これでいいですか。

③⑧ このはは、きってもかまいませんか。

④⑩ いいですか。

⑤⑤ これでいいですか。

(2)⑨ そうですか。

が(4)

(1)⑧ じゅうじにもんがあきます。

②③ ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。

(2)④② このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

かしら(3)

① あら、ちゃしつかしら。

② はいってもいいのかしら。

⑥⑧ きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

かまいません(1)

③⑧ このはは、きってもかまいませんか。

から(1)

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

きびしい [厳しい] (1)

⑤② とてもきびしいせんせいよ。

きょう [今日] (2)

④⑨ あきごさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

⑥⑧ きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

きる [切る] (3)

(1)⑧① これをいけるまえに、ここをきっておきます。



(2)⑳ いいえ、きってはいけません。

(3)㉑ このはは、きってもかまいませんか。

きれいな(1)

⑬ きれいなね。

ください(4)

⑭ もしも、しばふにははいらないようにしてください。

⑳ はさみは、しっかりとみつようにしてください。

㉒ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。

㉔ やりなおしてください。

けいこ(5)

(1)㉕ はるごさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

㉗ あきごさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

㉙ きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

㉛ おはなのおけいこにいかなければならないわ。

(2)㉜ もっとおけいこしなくては……。

けっこうな(1)

㉞ けっこうです。

ここ(2)

㉟ これをいけるまえに、ここをきっておきます。

㊱ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

こちら(1)

㊲ ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

この(4)

㊳ このむらさきのいろ、すてきね。

㊴ このはは、きってもかまいませんか。

㊵ このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

㊶ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

このあいだ [この間] (1)

②⑨ このあいだも……。

これ(3)

③① これをいけるまえに、ここをきっておきます。

③⑧⑤⑤ これでいいですか。

こんな(1)

⑦① あら、もうこんなじかん。

さあ(1)

⑦⑦ さあ、はやくいきましようよ。

さきに [先に] (1)

⑥① そのふたをさきにとっておきます。

さん(4)

②⑥ はるごさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

③⑩ はるごさん、ちょっと。

④⑨ あきごさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

⑥⑩ あきごさん、ちがいますよ。

じ [時] (1)

⑧ じゅうじにもんがあきます。

じかん [時間] (1)

⑦① あら、もうこんなじかん。

した [下] (1)

④④ それは、もうすこししたにむけるようにしてください。

しっかりと(1)

③② はさみは、しっかりともつようにしてください。

しばふ [芝生] (1)

④④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。

じゃ(1)

⑦⑥ じゃ、いそいでいかなければ。

じゃあ(1)

⑥7 じゃあ、いっしょにならいきましょうよ。

しゃしん [写真] (1)

②4 しゃしんにとっておきたいわね。

じゅう [十] (1)

⑧ じゅうじにもんがあきます。

しょうかい [紹介] (1)

⑦0 せんせいにしょうかいするわ。

じょうずな [上手な] (1)

⑥4 なかなかじょうずにならないわ。

しょうぶ [菖蒲] (1)

②3 ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。

しろい [白い] (1)

②2 ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

ずいぶん [随分] (1)

②3 ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。

すこし [少し] (2)

④4 それは、もうすこししたにむけるようにしてください。

⑤4 みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

すてきな(1)

①9 このむらさきのいろ、すてきね。

すみません(3)

(1)④ あっ、すみません。

(2)①⑤⑦ あっ、すみません。

する(2)

(1)④8 もっとおけいこしなくては……。

(2)⑤⑧ もっとちゅういして、おこなくはいけません。

(3)①④ もしもし、しばふにはいらないようにしてください。

③2 はさみは、しっかりともつようにしてください。

- ④ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。  
(4)⑦ せんせいにしょうかいするわ。

せんせい [先生] (3)

- ⑤ どんなせんせい。  
⑥ とてもきびしいせんせいよ。  
⑦ せんせいにしょうかいするわ。

そう(4)

- (1)⑧ そうですか。  
⑨ そうね。  
⑩ そうでしょうね。  
(2)③ そうね。

その(1)

- ⑪ そのふたをさきにとっておきます。

それ(2)

- ⑫ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。  
⑬ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

そんなに(1)

- ⑭ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

だ(1)

- ⑮ わたし、ちこくだわ。

たい(2)

- ⑯ シャしんにとっておきたいわね。  
⑰ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

だいじょうぶな(1)

- ⑱ ええ、だいじょうぶよ。

たかい [高い] (1)

- ⑳ みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

だめな(1)

㉓ あっ、だめです。

ちがう [違う] (1)

㉔ あきごさん、ちがいますよ。

ちから [力] (1)

㉕ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

ちこく [遅刻] (1)

㉖ わたし、ちこくだわ。

ちゃ [茶] (2)

㉗ あきごさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

㉘ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

ちゃしつ [茶室] (1)

㉙ あら、ちゃしつかしら。

ちゅうい [注意] (1)

㉚ もっとちゅういして、おかなくてははいけません。

ちょっと(1)

㉛ はるごさん、ちょっと。

で(2)

㉜㉝ これでいいですか。

でしょう(5)

(1)㉞ このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

㉟ あきごさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

(2)㊱ そうでしょうね。

(3)㊲ はるごさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

㊳ むずかしいんでしょうね。

です(10)

(1)㊴ あっ、だめです。

㊵ けっこうです。

(2)㊶ なかにはいってもいいですか。

- ③⑥ これでもいいですか。  
④⑩ いいですか。  
⑤⑤ これでもいいですか。  
(3)⑨ そうですか。  
(4)③⑦ いいですね。  
④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。  
(5)②④ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

でも(2)

- ②⑧ でも、まだへたなのよ。  
⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

とても(1)

- ⑤② とてもきびしいせんせいよ。

とる [取る, 撮る(写真)]

- ②④ シャしんにとっておきたいわね。  
⑥① そのふたをさきにとっておきます。

どんな(1)

- ⑤① どんなせんせい。

ない(3)

- ①② まだあかないのね。  
①④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。  
⑥④ なかなかじょうずにならないわ。

なか [中] (1)

- ⑥ なかにはいってもいいですか。

なかなか(1)

- ⑥④ なかなかじょうずにならないわ。

なくては(2)

- ④⑧ もっとおけいこしなくては……。  
⑤⑧ もっとちゅういして、おかなくてははいけません。

なくても(1)

③④ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

なければ(3)

⑤④ みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

⑦② おはなのおけいこにかなければならないわ。

⑦⑥ じゃ、いそいでいかなければ。

なげる [投げる] (1)

⑩ ぼうや、いしをなげてはいけませんよ。

ならう [習う] (2)

(1)⑥⑦ じゃあ、いっしょにならいきましょうよ。

(2)⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

ならない(1)

⑦② おはなのおけいこにかなければならないわ。

なる(1)

⑥④ なかなかじょうずにならないわ。

に(12)

(1)⑥ なかにはいってもいいですか。

①④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。

④④ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

(2)⑧ じゅうじにもんがあきます。

③① これをいけるまえに、ここをきっておきます。

(3)⑥⑧ きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

⑦② おはなのおけいこにかなければならないわ。

(4)⑦⑩ せんせいにしょうかいするわ。

(5)②④ シャしんにとっておきたいわね。

ね(11)

(1)⑩ まだあかないのね。

- ⑮ きれいなね。
- ⑲ このむらさきのいろ、すてきなね。
- ⑳ ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。
- ㉑ シャリンにとっておきたいわね。
- ㉒ そうね。
- ㉓ いいですね。
- ㉔ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。
- ㉕ そうでしょうね。
- ㉖ むずかしいんでしょうね。
- (2)③ そうね。

ねえ(2)

⑬⑳ ねえ。

の(9)

- (1)⑲ このむらさきのいろ、すてきなね。
- ㉑ ほら、こちらのしろいはなもいいわ。
- ㉒ はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。
- ㉓ あきこさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。
- ㉔ おはなのおけいこにいかなければならないわ。
- (2)④ おはなをいけるのは、むずかしいわ。
- (3)② はいってもいいのかしら。
- ⑫ まだあかないのね。
- ⑬ ずいぶんいろいろなしょうぶがあるのね。
- ⑭ でも、まだへたなのよ。

のこす [残す] (1)

④ このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

は [葉] (2)

- ③ このはは、きってもかまいませんか。
- ④ このはをのこしておいたほうがいいでしょう。



は(6)

(1)③② はさみは、しっかりともつようにしてください。

③⑧ このはは、きってもかまいませんか。

④④ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。

④⑨ あきこさん、きょうは、おちゃのおけいこでしょう。

(2)④④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。

(3)④⑥ おはなをいけるのは、むずかしいわ。

はい(7)

⑤⑩③③③⑤④⑨⑤⑨⑥③ はい。

はいる [入る] (3)

(1)④④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。

(2)② はいってもいいのかしら。

⑥ なかにはいってもいいですか。

はいれる [入れる] (1)

⑦ まだはいれません。

はさみ(1)

③② はさみは、しっかりともつようにしてください。

はじめる [始める] (1)

②⑥ はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

はな [花] (5)

②② ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

②⑥ はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

④⑥ おはなをいけるのは、むずかしいわ。

⑦② おはなのおけいこにかなければならないわ。

はやい [早い] (1)

⑦⑦ さあ、はやくいきましようよ。

はるこ [春子] (2)

②⑧ はるごさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

③⑩ はるごさん、ちょっと。

ふた(1)

⑥① そのふたをさきにとっておきます。

へたな〔下手な〕(1)

②⑨ でも、まだへたなのよ。

ほう〔方〕(2)

④② このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

ほうや〔枋や〕(1)

①⑥ ほうや、いしをなげてはいけませんよ。

ほら(2)

②② ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

④① ほら。

ほんと(2)

②① ほんと。

⑦④ あら、ほんと。

まえ〔前〕(1)

③① これをいけるまえに、ここをきっておきます。

ましょう(2)

⑥⑦ じゃあ、いっしょにならしましょうよ。

⑦⑦ さあ、はやくいきましょうよ。

ます(4)

⑧, ③①, ⑥①, ⑥①

ません(1)

⑦

まだ(3)

⑦ まだはいれません。

⑫ まだあかないのね。

⑳ でも、まだへたなのよ。

みぎて [右手] (1)

⑤④ みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

みる [見る] (2)

(1)⑥⑥ きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

(2)⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

むける [向ける] (1)

④④ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。

むずかしい [難しい] (2)

④⑥ おはなをいけるのは、むずかしいわ。

⑥⑤ むずかしいんでしょうね。

むらさき [紫] (1)

①⑨ このむらさきのいろ、すてきね。

も(3)

②② ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

②⑨ このあいだも……。

⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

もう(3)

④④ それは、もうすこしたにむけるようにしてください。

⑤④ みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

⑦① あら、もうこんなじかん。

もしもし(1)

①④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。

もつ [持つ] (1)

③② はさみは、しっかりともつようにしてください。

もっと(2)

④⑨ もっとおけいこしなくては……。

⑤⑧ もっとちゅういして、おかなくてははいけません。

もん [門] (1)

⑧ じゅうじにもんがあきます。

やりなおす [やり直す] (1)

⑥② やりなおしてください。

よ(8)

①⑥ ぼうや、いしをなげてはいけませんよ。

②⑧ でも、まだへたなのよ。

③④ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

⑤② とてもきびしいせんせいよ。

⑥① あきこさん、ちがいますよ。

⑥⑦ じゃあ、いっしょにならいきましょうよ。

⑥⑨ ええ、だいじょうぶよ。

⑦⑦ さあ、はやくいきましようよ。

ようだ(3)

①④ もしもし、しばふにははいらないようにしてください。

③② はさみは、しっかりともつようにしてください。

④④ それは、もうすこししたにむけるようにしてください。

わ(8)

(1)②② ほら、こちらのしろいはなもいいわ。

④⑥ おはなをいけるのは、むずかしいわ。

⑥④ なかなかじょうずにならないわ。

⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

⑦① せんせいにしょうかいするわ。

⑦② おはなのおけいこにいかなければならないわ。

⑦⑤ わたし、ちこくだわ。

(2)②④ シャしんにとっておきたいわね。

わたし [私] (2)

⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

⑦⑤ わたし、ちこくだわ。

を(13)

①⑧ ぼうや、いしをなげてはいけませんよ。

②⑧ はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

③① これをいけるまえに、ここをきっておきます。

③① これをいけるまえに、ここをきっておきます。

③④ ああ、そんなにちからをいれなくてもいいですよ。

④② このはをのこしておいたほうがいいでしょう。

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

④⑤ それをいけてから、ここにこのはなをいけたほうがいいですね。

④⑥ おはなをいけるのは、むずかしいわ。

⑤④ みぎてをもうすこしたかくあげなければいけません。

⑥① そのふたをさきにとっておきます。

⑥⑥ でも、わたしもおちゃをならってみたいわ。

⑥⑧ きょう、おけいこをみにいってもいいかしら。

ん(2)

②⑧ はるこさん、おはなのおけいこをはじめたんでしょう。

⑥⑤ むずかしいんでしょうね。

## 資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画

「おけいこを みに いっても いいですか」

——許可・禁止の表現——

企 画 国立国語研究所

制 作 日本シネセル株式会社

フ ィ ル ム 16m/mEKカラー・スタンダード

巻 数 全1巻

上映時間 5分

現 像 所 東映化学

録 音 読売スタジオ

完 成 昭和56年8月31日

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一 制作担当 佐 藤 吉 彦

脚 本 前 田 直 明 演 出 前 田 直 明

演出助手 野 沢 和 之 撮 影 相 良 国 康

撮影助手 渡 辺 晶 照 明 伴 野 功

照明助手 水 村 富 雄

録 音 谷 口 幸 充 (読売スタジオ)

ネガ編集 亀 井 正

配 役 春 子 後 藤 真 寿 美 夏 子 唐 木 明 子

秋 子 下 条 千 糸 美 お花の先生 山 中 康 司

お茶の先生 飯 田 テル子 監 視 員 百 良 雄

(監視員の声 及 川 智 靖) 男 清 田 潤

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」	
2	テーマ・タイトル 「おけいこを みに いても いいですか」 —許可・禁止の表現—	
3	<神宮内苑>	
4	春子, 夏子, 秋子, 茶室の前 を通る	春子「①あら, ちゃしつかし ら。」 秋子「②はいってもいいのか しら。」
5	茶室	夏子「③そうね。」
6	三人の背後から監視員来る 話しかける秋子	秋子「④あっ, すみません。」 監視員「⑤はい。」 秋子「⑥なかにはいってもい いですか。」 監視員「⑦まだはいれませ ん ⑧じゅうじにもんが あきます。」 秋子「⑨そうですか。」 監視員「⑩はい。」 秋子「⑪ありがとう。」 春子「⑫まだあかないのね。」 夏子「⑬ねえ。」
	監視員去る 歩き出す三人	
7	芝生に入って写真を写してい る男	
8	監視員が通りかかり注意する	監視員「⑭もしもし, しばふ にははいらないように してください。」
9	写真を写す男, 謝って去る	男「⑮あっ, すみません。」

- 10 石を池に投げている男の子
- 11 監視員がやってきて注意する。  
背後には、歩く春子、夏子、  
秋子。走り去る男の子、春子  
たちとすれちがいざまに転ぶ。  
起きあがり、また走って行く
- 12 水蓮
- 13 菖蒲田にやって来る三人
- 14 菖蒲の花を指す秋子
- 15 菖蒲の花を指す夏子
- 16 菖蒲田
- 17 話をする三人
- (回想に入る)
- 18 <生け花教室>
- 19 春子、水盤に枝を生けている  
何度も差すが、すぐ倒れてし  
まう  
先生が春子の所にまわって  
くる
- 20 先生、春子に話しかける
- 監視員「⑩ぼうや、いしをな  
げてはいけませんよ。」  
春子・夏子・秋子「⑪あっ、  
あら。」
- 夏子「⑫きれいね。」  
秋子「⑬このむらさきのい  
ろ、すてきね。」  
夏子「⑭ねえ。」  
春子「⑮ほんとに。」  
夏子「⑯ほら、こちらのしろ  
いはなもいいわ。」  
春子「⑰ずいぶらいろいろな  
しょうぶがあるのね。」  
夏子「⑱しゃんしんにとってお  
きたいわね。」  
秋子「⑲そうね。――  
⑳はるこさん、おはな  
のおけいこをはじめた  
んでしょう。  
春子「㉑ええ。  
㉒でも、まだへたなの  
よ。――  
㉓このあいだも……。」
- 先生「⑳はるこさん、ちよっ



21 春子、ハサミを持って切る。  
しかし、うまく切れない  
先生のアドバイスでうまく枝  
の切り口を十文字に切る

春子、切った枝を先生に示  
す

22 枝を生ける春子、今度はうまく  
固定できる

23 先生、枝をとる

24 先生、葉を隠す  
先生

25 春子、枝を生ける

26 先生、春子の枝を直す

(回想終わり)

27 <神宮内苑>

28 菖蒲田の小道を歩く三人

と。

①これをいけるまえ  
に、ここをきっておき  
ます。」

先生「②はさみは、しっかりと  
もつようにしてくだ  
さい。」

春子「③はい。」

先生「④ああ、そんなにちか  
らをいれなくてもいい  
ですよ。」

春子「⑤はい。——

⑥これでいいですか。」

先生「⑦いいですね。」

春子「⑧このはは、きっても  
かまいませんか。」

先生「⑨いいえ、きってはい  
けません。

⑩いいですか。

⑪ほら。

⑫このはをのこしてお  
いたほうがいいでしょ  
う。」

春子「⑬はい。」

先生「⑭それは、もうすこし  
したにむけるようにし  
てください。」

先生「⑮ それをいけてか  
ら、ここにこのはなを  
いけたほうがいいです  
ね。」

夏子「⑯あきこさん、きょう  
はおちゃのおけいこで  
しょう。」

		春子「④⑥おはなをいけるのは、 むずしいわ。」
		夏子「④⑦そうでしょうね。」
		春子「④⑧もっとおけいこをし なくては……。」
		秋子「④⑩ええ。」
		夏子「④⑪どんなせんせい？」
		秋子「④⑫とてもきびしいせん せいよ。」
	(回想に入る)	
29	<日本間>	
30	茶室 秋子がお茶をたてている	
31	柄杓を取りあげる 注意され、やり直す秋子	先生「④⑬あつ、だめです。 ④⑭みぎてをもうすこし たかくあげなければい けません。」
		秋子「④⑮これでいいですか。」
		先生「④⑯けっこうです。」
32	秋子、茶碗に湯を入れ、柄杓 を釜にかけようとする。しか し、柄杓を釜に落としてしま う	
33	謝る秋子	秋子「④⑰あつ、すみません。」
34	注意する先生	先生「④⑱もっとちゅういし て、おかなくてははいけ ません。」
		秋子「④⑲はい。」
35	掛軸	
36	秋子、棗(なつめ)を取りあ げ、茶杓で茶碗に茶を入れ る。そして、棗を元の所にも	

37	どして、柄杓を取ろうとする。 注意する先生	先生「⑩あきこさん、ちがいますよ
		ますよ
		⑪そのふたをさきにと っておきます。
		⑫やりなおしてください。」
38	秋子、やり直しをする。茶碗 に湯を入れて茶をたて始め る (回想終り)	秋子「⑬はい。」
39	<神宮内苑>	
40	菖蒲をみている秋子	秋子「⑭なかなかじょうずに
41	菖蒲をみながら話す三人	ならないわ。」
		夏子「⑮むずかしいんでしょ うね。
		⑯でも、わたしもおち ゃをならってみたいわ。」
		秋子「⑰じゃあ、いっしょに ならいましょうよ。」
		夏子「⑱きょう、おけいこを みにいってもいいかし ら。」
		秋子「⑲ええ、だいじょうぶ よ。
		⑳せんせいにしょうか いするわ。」
42	春子	春子「㉑あら、もうこんなじ かん。
		㉒おはなのおけいこに いかなければならない わ。」
43	三人、歩き出す	秋子「㉓えっ?
		㉔あら、ほんと。

44	三人，菖蒲田を出て行く	<p>㊟わたし，ちこくだわ。」</p> <p>春子「㊞じゃ，いそいでいかなければ。」</p> <p>夏子「㊟さあ，はやくいきましょうよ。」</p> <p>春子・秋子「㊠ええ。」</p>
45	<p>企画・制作タイトル</p> <p>企画 国立国語研究所</p> <p>制作 日本シネセル株式会社</p>	

日本語教育映画解説21

おけいこをみにいってもいいですか

—許可・禁止の表現—

昭和58年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14  
電話 東京(900)3111(代表)